



TITLE:

随想)Oh happy day !

AUTHOR(S):

西村, 隆一

---

CITATION:

西村, 隆一. 随想)Oh happy day !. 泌尿器科紀要 1965, 11(4): 261-262

ISSUE DATE:

1965-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112734>

RIGHT:

## 泌 尿 器 科 紀 要

第 11 巻 第 4 号

昭和 40 年 4 月

## 随 想

## Oh happy day!

横浜市立大学助教授 西 村 隆 一

Huggins に依り前立腺癌が男性ホルモン依存性で、このため治療法として所謂抗男性ホルモン療法が提唱されてから間もなく25年になる。初診時、すでに根治手術の時期が失われて居る症例は略々90%に達するため前立腺癌では抗男性ホルモン療法が最も重要な治療法となるものであり、又、Huggins の功績は非常に大きなものと云えよう。

しかし、此の抗男性ホルモン療法にも、ひとつの宿命があつた。それは、確かに此の療法は有効であるが、又、一方、決して前立腺癌を根治させるものではなく、早晚再発は免れ得ないと云う事実である。それ故、抗男性ホルモン療法で前立腺癌を根治させるにはどうすれば良いか、又、再発した症例の治療をどうすべきか等が大きな研究テーマとなつた。そして、今日では前立腺癌のホルモン依存性は男性ホルモンとの関係だけで説明する Huggins の考え方より複雑となり、生体内のホルモン性環境が重要視される様になつてきた。

前立腺癌のホルモン依存性を生体内のホルモン性環境と云う立場より世界中の学者がそのホルモン療法を研究して居るが、我が国の研究者達の優れた業績が数多いことも論を俟たぬ所である。泌尿器科領域に於ける内分泌学を勉強して居る私に特に印象深い研究としては、第15回日本医学会総会での市川名誉教授一派の報告で、前立腺癌のホルモン依存性をEstrogen又はEstrogenとCorticoid(更にAndrogen)で間脳機能を低下せしめ得る場合と解釈されたが、私は此の考え方に深い感銘を与えられたものである。又、昨年広島での加藤教授の宿題報告は前立腺の基礎及び臨床の広範囲にわたるすぐれた研究で、私自身やつてみたいと思つて居たテーマをひとあし先にやられてしまつた様な気がしたのである。更に、近着のJournal of Urologyに東大泌尿器科浅野氏がニューヨークのDr. George Nagamatsuの所に留学中の研究が載つて居る。此の論文は全米泌尿器科学会で銀賞を与えられた研究で、Prolactinと前立腺の関係を論じたものである。Prolactinと前立腺との関係に就ては、すでにGrayhack & Scottに依りTestosteroneとProlactinは前立腺発育に協力的に作用することが報告されて居た。それ故、男性に於けるProlactinのtarget organが前立腺と考えれば当然前立腺摘出に伴う下垂体中Prolactinの態度は研究されるべきであり、又、そのことに思いつけば決して困難な仕事とも思えないが実際には誰も手をつけなかつた問題を浅野氏は見事解明されたのである。

さて、先に述べた前立腺発育にTestosteroneとProlactinが協力作用があることはGrayhack & Scottがはじめて唱えたものであるが、このScottとは御承知の如くJohns HopkinsのWilliam Wallace Scott教授である。Scott教授は1953年にはProlactinを

another prostate stimulating hormone と云つて居られる。前立腺癌のホルモン療法に於ける Scott 教授の業績は此の Prolactin の問題のみならず、此の分野のすべての面でイニシアティブをとつて居られると云えよう。即ち、Huggins の唱えた抗男性ホルモン療法では前立腺癌を根治せしめないことが判明すると

a) 男性ホルモン依存性と云うことが、前立腺癌の発育に必須ならば、体内から完全に男性ホルモンを除去するには、castration-estrogen treatment 以外にどんな方法があるか。

b) 前立腺癌の発育に男性ホルモン以外の他の factor があるとすれば、それを探究せねばならない。

と述べて居られる。これは今から15年前の Scott 教授の意見である。此の正しい判断に基いた研究が副腎切除術及び下垂体切除術等の画期的な治療法の発達に貢献したのである。副腎切除術及び下垂体切除術に就ては今後尚、解明されねばならない多くの問題を有するものと思われるが、Scott 教授に依り研究の進むべき大道が示されたことは事実である。更に敬服すべきことは、Scott 教授は今日尚輝しい業績を相次いで発表せられて居ることである。御承知の如く1963年7月より Scott 教授を編輯者として Investigative Urology が発行されて居る。此の創刊号の巻頭言で Scott 教授は臨床医学に密接した基礎的研究の重要性を強調して居られる。私の様に若い者は臨床医家でありながらややもすれば基礎的研究のみになり勝ちであるため教えられるものがあつた。

Investigative Urology は今日迄に10冊が刊行されて居るが Scott 教授一派に依り前立腺に関する9つの論文が発表されて居る。エネルギーな研究は全く驚嘆すべきものがある。Scott 教授と私の如き若輩とではすべてに於いて雲泥の差は勿論である。しかし、私はここでストレス学説の Selye 教授の The story of the adaptation syndrome を思い出す。1936年 Selye は30才にも満たない若さで警告刺激の学説を発表しその後更に研究を続けストレス学説を樹立するのである。しかし、此の偉大な研究も出発点では実験動物を寒冷にさらし、その下垂体を乳鉢ですりつぶすと言う設備も費用もいらない方法で若い Selye に依り行われたものがストレス学説発展の基礎になつて居ることである。若輩の小さな仕事でも無限に発展し得る potential を有し得るものと考え前進を続けるべきであると思つて居る。

過去に於いて Scott 教授は前立腺癌のホルモン療法研究の進むべき大道を示されたが、今日では、現段階で前立腺癌治療の目標をかかげられ Scott 教授もその目標をめざして前進して居られる。私にとって、Scott 教授の示されたターミナルの灯は遠く、そこへの到達は不可能に近い程けわしい道程と思われるが、一歩づつ、少しでもその目標に近づくべく努力しなくてはと考えて居る。最後に Scott 教授の論文より私の感銘を受けた一文を引用する。

What a glorious day it will be for urology when we can shrink the benign nodular hyperplastic prostate, quiet the carcinoma one and increase libido and potentia, all with a tablet. Oh happy day! (前立腺肥大症の縮小、前立腺癌の静止、及び libido, potentia の増進、これらすべてを錠剤の服用によつて可能ならしめる日が来れば、それは泌尿器科学に於ける何と輝かしい日であろうか。Oh happy day!)